

Title	古今集仮名序の注釈と改訂について(二) : 六人部是香『訂正古今集序』
Sub Title	A study of the note and revision of Kokinshu-kanajo (2) Mutobe Yoshika's Teisei-kokinshujo
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2009
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.44 (2009. ) ,p.103- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20090000-0103">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20090000-0103</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 古今集仮名序の注釈と改訂について(二)

## ―六人部是香『訂正古今集序』―

川上 新一郎

### 第二章 六人部是香『訂正古今集序』

#### 一

香が所持していた清輔本古今集の性格を検討する目的のみに限ったものであった。

本稿では、それと視点を換え、近世国学者の古今集仮名序の改訂という点から、前回の荷田春満『古今和歌集序説』に続き、是香の古今集論の内、『訂正古今集序』を取上ることとする。

平田派の国学者六人部是香(文化三―文久三、一八〇六―一八三三)に古今集に関する一連の著作があることは、早く佐佐木信綱氏が当時六人部家に所蔵されていた是香の遺稿『古今集撰緝考』『古今集仮名字序真字序論』『訂正古今集序』を用いて紹介されている<sup>①</sup>。また、稿者自身もかつて言及したことがある<sup>②</sup>。そこでは、佐佐木氏の論が是香の古今集論全般にわたるものであったのに対し、拙論は、清輔本古今集研究の立場から、是

佐佐木氏が調査された是香の遺稿は三書とも以後所在不明であり、近代の転写本である京都大学文学部研究室蔵本(Ec<sup>III</sup>―4、〔大正〕写)及び識語はないがそれを岡田希雄氏が転写したと思われる国会図書館蔵本(わ九一―、一三―五岡)によって知られていた<sup>③</sup>。ところが、このうち『訂正古今集序』については自筆稿本が京都女子大学附属図書館吉澤文庫に所蔵されている

ことが判明したので、その紹介を兼ねて内容を検討することとする。前掲佐佐木氏の紹介は詳細で意を尽くしたものであるが、『訂正古今集序』における是香の本文改訂についてはあまりふれておられないので、今回はその点の紹介を試みたい。

該稿本の書誌は左のごとくである。

京都女子大学附属図書館吉澤文庫蔵（YM九一、二三三―R

六〇五五八）

訂正古今集序

安政四年（一八五七）六人部是香自筆稿本・近藤芳樹自筆

書入

一冊

袋綴。浅縹色表紙（二六・二×一九・一糎）。外題なし。内

題、「訂正古今集序」。料紙、楮紙。墨付、五十丁。遊紙、前丁、後なし。但し、前遊紙ウに逆さの文字が二行あるが、反故を利用したためで本書とは無関係である。字面高さ、約一九・五糎。他に近藤芳樹の頭注あり。每半葉十行書。是香による貼紙訂正、朱の書入訂正があるが、比較的僅少である。その一方、単純な誤脱を朱訂する箇所があり、さらなる草稿が存在し、それを見ながら訂正稿を作成したものかとも思われる。

奥書

上件<sup>ウ</sup>おのか見えたるかきりの諸本に就て誤れ／るを正し脱たるを補ひ纒入を削り錯乱を訂し」つれと尚諸本ともに脱たりとおほしきは試に補／もして撰者かそのかみのおもむきには復<sup>カ</sup>しつ／る物から尚善本も世には伝はよく訂すへくこそ

安政四年六月十六日脱稿

六人部是香（花押）

（以下別筆）

上層にいさ、か所存を記し侍るもむつま

しき友とたのみ侍／れは也なめし事の侍

らんをはゆるしたまひてよ

かうな庵のあるし芳樹

印記なし。吉澤義則氏旧蔵。

本書は奥書に見るように、安政四年に脱稿した是香の自筆稿本であり、それを見せられた友人の近藤芳樹（享和元―明治十三、一八〇一―一八〇）が、自らの見解を頭注して是香に返却したものである。後述するように、かなり忌憚のない評を下している。本書が佐佐木氏が見た本そのものであることは、佐佐木氏が近藤芳樹の評にふれて次のように述べておられることから

も明らかである。

しかして彼は、その訂正古今序を学友近藤芳樹に評を求めた。それで鼈頭に芳樹が書入の批評があるが、芳樹の説は穩當で、いかにもと思はれる所が多い。(傍点佐佐木氏)

さて、本書は巻頭に総評と題する前書があり、そこで古今集諸本について簡単に述べた後、後述のような仮名序の改訂方法を示す凡例様のものがある。本書の眼目は仮名序本文の改訂であるが、その前に総評の部分について少し見ておきたい。

是香が当時の国学者の中でも特に古今集の諸本に関心があつたことは、以前に述べたことがあるが、建久五年の奥書を有する伝家隆筆本(是香は主として「建久本」と呼称する、清輔本である)の他に、唐紙卷子本、高野切、伝行成筆曼殊院本といった古鈔本、古筆切を直接あるいは間接に披見し、さらには詳細は不明ながら、叶雲阿闍梨親筆本(真名序)、雅本(栄雅卿の抄本)とも称す)及び小沢蘆庵の校合本による為本とも校合している。また、春葉集所載の春満筆と称する仮名序も参照している。これらはいずれも定家本とかなりの異同がある本であったようであるが、その一方で、定家本諸本についても関心があつたことは、本書総評でうかがえる。それはこのように始まる。

此集の今世普く流布せる諸本は何れも京極中納言の校定し給へる貞応元年二年の二本嘉禎本の外なるは有事無し其は貞応元年の奥書に此集家々所レ採 雖説々多二且任二師説又加二了見二為レ備二後学二之證本二不レ顧二老眼之不堪二手自書レ之と見え同し二年本また嘉禎三年本などには上の奥書に連続て近代僻案之好士等以二書生之失錯レ称有識之秘事二可レ謂道之魔障二不レ可用レ之但如此用捨只可レ隨二其身之所好二可レ存二自他差別 同志者可レ隨レ之といふ数言を書添られたり 鍾愛孫姬 訖と記されたり

(朱による補入、見消ちは一々指摘すると煩雑なため、原則として訂正に従い、区別しない、清濁は本のまま)

これによって、是香は貞応元年本、貞応二年本、嘉禎三年本を見ていたことがわかる。

このうち貞応二年本が貞応二年七月二十二日本であることは容易に判るが、貞応元年本は「近代僻案之好士等」以下が存在しないとすると点が不審で、いかなる本か明らかでない。一方、嘉禎三年本は、「授鍾愛孫姬訖」とあることより、嘉禎三年正月二十三日日本かと思われる。

また、嘉祿二年四月九日本にも言及して、是香は自分はまだ

見ていないとする。

次に、貞応二年七月二十二日本にも様々な奥書の本があることにふれ、次のように述べる。

此本（貞応二年本、稿者注）證本となりて至徳の頃四辻儀同三司善成公の奥書本にも證本之旨趣既明白尤足採用仍不顧狼籍所染菟毫也偏是應忘後嘲而已と記されたまた一古本の奥書には右集者自將軍家御賜之御本定家卿於一条高倉御陣申出之防州岩国住源弘節頼懇望之間雖有老眼之憚為備末代證本不違仮名遣等令書写數ヶ度校合畢尤可秘之者也文明六年甲午八月廿日持教とあるは彼貞応本の後に足利氏に伝つるを写しつるなるべし

ここに四辻善成の奥書本とあるが、四辻善成筆古今集は現在曇華院に存在することが指摘されており、その奥書は正しくは香の引用の通りである。また、同様の奥書を有する本として、河野美術館蔵本（一一〇―七〇九）がある。但し、善成の書写を是香が「至徳の頃」とした根拠は明らかでない。

次の持教奥書を有する本については知るところがないが、持教（持孝とも）は三井寺の僧都であるとのことである。

これらによって、是香が諸本に関心を持ち、また、以下の記述によっても、定家本とそれ以外の本を区別する認識もあつたことがわかる。

総評はさらに続いて次のように述べる。

かくて今世伝れる貞応本は為世卿より頼阿に伝られしを経賢孝堯患孝常縁宗祇と伝來つるを後に宗祇に更に二条家より伝られし本の有つるを其師なりし東野州に見せたりしかは素より伝來し本に比較して此処彼処改めつるよしなるを其本の世には流布しつるなりされば同じ貞応の奥書添りつる古き本どもの中には聊今本と異なる事も交れるはかゝる故なるぞかし

堯尋とあるべきが孝尋とあるのは単純な書き誤りであろうが、ここでは伝心集などに見られる一般的な血脉によつてゐる。また、宗祇が師常縁から伝えられた本の他に、二条家から伝えられた本を所持してゐて、比較したという認識は当否はともかく、是香がそれなりに伝授の流れを知つていたことを物語る。それとともに、是香が古今伝授を頭から否定はしていないことをも示している。

さらに、次の二種の奥書が引用される。

文明四年の常縁か奥書に伝受之後宗祇庵主書此一帖以被見常縁所存少加筆加詞者也門弟隨(ママ、「一」脱カ)思尤在之仍為後證又加此詞畢また文龜元年宗碩か奥書に後年又宗祇老聞書引合不審処少書改之者歟とも見えたれば此二人か手に聊改めつる事ども、有しかは同本なから少しつ、異なる事とも、混雜つるなり

この奥書は一見すると、本文の流れから古今集の奥書であるかのごとく思われるがそうではない。

前半の文明四年の常縁奥書は両度聞書のもの、後半の文龜元年宗碩奥書は宗碩聞書のもの、いずれも古今集の聞書(注釈)の奥書である。これらはそれぞれの聞書から個別に奥書を引用したと考えてもよいが、むしろ十口抄からまとめて引用した可能性の方が高い。十口抄はこの二種の奥書を並べて末尾に置いているからである。但し、十口抄はこのほかに肖柏の古聞の奥書をも並べて引用しているので、それに言及しないのは不自然との見方も出てこようが、ここでは、宗祇の頃に貞応本の本文に改訂が加えられたことを述べようとしているので、是香はそれに関連する記述がない古聞の奥書にまで言及する必要なしと考えたものであろう。

ついで、定家の本文校訂態度について述べた部分がある。現代の目からするといかがかと思われる点があり、それが、後述の仮名序の大改訂を誘発する一因となっている。

此序(仮名序、稿者注)は本より其草稿に前後の二本有つるを奏覧の本は伝はらで草稿本に就て写し伝つる物と察れたるを其草稿には貫之が自躬の心覚に傍書し置つる事も其妹または息なりし定文などの書加おけりし事なども有つらんを後に写し取つる人の傍書は傍書のまゝに写せるも又は其傍書を本文に書加つる本も有しかは彼中納言か頃にはさま／＼の本ありて一定為さりしかば其時よく選て棄べきは棄採べきはとらるべかりしをそれもこれも拾取て證本と為られし事なれば遂に後世に到るまで数多の識者等も思迷ひ貫之が為にもいと心苦しく思ゆる事な多くなり来にける

定家はことに仮名序において傍書なども取入れ、出来るだけ全てを含む合成本文を作成したというのが、是香の見解である。是香は仮名序に文意の解しがたい所があるのを、現在伝わる仮名序は草稿本であり、訂正、書入、傍書などがあつたのを、全てを取り込む形で本文を立てたため、混乱を生じたのであると

している。しかも、それには定家が大きく関わっていると  
のである。この点については既に佐佐木氏も「自分の考では、  
古今の序は元来からいかゞしい点があつたので、春満をはじめ、  
景樹またこの是香などが訂正の企は、貫之を尊ぶ余りに出たわ  
ざでいかゞと思ふ」と述べておられる。

こうして、是香は仮名序を正しい形に戻すには、定家本以前  
の本によらねばならないとする。そこで本稿で先に述べた非定  
家本を列挙し、これらを参照する必要があるとするのである。

そして、春満（春葉集所載のもの）や景樹（正文）の説にも  
採るべき点はあるが、私意によつていので問題が多いとし、  
自らの定家本以前の古本にも目配りして改訂していると称す  
のである。つまり、次のように述べ、凡例を掲げている。

近くは荷田東磨か家集にみつからか手して書たりし序文香  
川景樹か正文などに今本とは増減せる事の多かるは唯みつ  
からか考もて訂正しつる事とも多く中には珍らしく考得つ  
る事はた無にしもあらされとも原私の狹意より出つる説な  
れば却て物そごなひとなれる事多かりか、れば今は彼古本  
どもに拠て今本の誤を訂し脱たるを補ひ衍れるを削て訂正  
しつる物から其古本ともにも尚誤脱せる処も多かれはさ

る処に到ては新に補足さ、れば応はざる条もなきにしも  
あらされば其総躰は貞応本を本文として諸本に就て訂正し  
其訂正しつる趣を傍書とは成しつるなり但し其訂正しつる  
にもさま／＼の異別あれば其標を付置事左の如し

○傍書の左にもあれ本行の中にもあれ此小圈あるは古  
本に拠て改つるなり

△同しく此標あるは古本ともには見えされとも 拠  
りて改めつるなり

□字に此圈を入たるは削り棄べき文なり

〰如此連続たる圈を入たるは錯乱の文を削去たる  
を再ひ加入たる標なり

○字に圈を添たるは今新に補ひつる文なり

この印は以下の是香整理の仮名序に加えられる。こういっ  
た論理性と分類癖は是香の特色の一つと見てよからう。

また、是香が仮名序を改訂するに当つては、非定家本系の古  
本を重視し、さらに、批判的ではあるものの、『春葉集』所載  
の仮名序と景樹の正義に含まれる正文を参考に行つて訂正  
分かる。

是香の仮名序の改訂について述べる前に、是香が仮名序と真名序の關係をどのように考えていたかを述べておく。これについては、『古今集仮字序真字序論』に述べられているが、複雑多岐に亘るので、今は佐佐木氏の要約によって見ることにすると、「仮字序は初度の奏上の時、本集にそへて別に奉つたもの、真字序は稍後に仮字序を本として、漢文に訳したるもの、然も今伝はれる仮字序には、脱入多く、却つて仮字序の原形を伝へてゐる真字序に依つて正さるる所の所もある」(傍点佐佐木氏)というのである。<sup>13)</sup>ここで「初度の奏上」と是香が称するのは延喜五年を続萬葉集の撰進と統いての古今集撰進の奉勅の年とし、翌六年に「初度の奏上」があつたとするのである。延喜五年の部分は一応良しとするも、六年を「初度の奏上」とする根拠が薄弱なことは佐佐木氏が指摘するとおりである。さらに、是香は以後さらに増補され、延長承平の頃に再び奏上されたとする

1、ひと<sup>○</sup>の<sup>○</sup>こ、ろを

2、世につたはれることは

のである。そして、現行の古今集は再度の奏覧本ではなく、中途半端な草稿本であるとするのである。仮名序は「初度の奏上」から存在したものであるが、現行本は混乱があり、「稍後」の後世(これを『本朝文粹』成立以前、おそらくは康保安和の頃から寛和永延の頃までとする)に何人かが作つた真名序によつて訂正できるとするのである。そのころにはまだ混乱していない仮名序が存在しており、現行真名序はそれに依つていと考えるのである。是香の論の疑問点については佐佐木氏が詳細に述べられているので、その当否は改めて論じないが、以上の是香の考えをふまえないと以下の仮名序本文の改訂は理解できない。

まず、是香の考えとして、仮名序の古注と六義の例歌は後人の所為として全て削除している。これは、春満や景樹も同様であり、国学者では普通の考えである。<sup>14)</sup>右以外で左記のような改訂を施す。



- 3、人の世となりてすさのをのみことよりぞみそもじあまりひともしはよみける
- 4、天雲のたなひくまでおひのほれることくにこのうたもかくのことくなるべし
- 5、難波津の歌はみかとのおほんはじめよみてたてまつれるなり
- 6、浅香山のことの葉はうねめのたはふれよりよみつるにて
- 7、そもミ歌のさまむつなりからの歌にもかくぞ有べき
- 8、むつにはいはひうた(といへる)ことのたくひなるべし
- 9、あるは花をもてあそふとてたよりなきところまとひ
- 10、うたをいひてそなくさめみける
- 11、きのふはさかえおこりてけふは時をうしなひ
- 12、野中の清水をくみ
- 13、なからの橋もつくるなりときく人は哥にのみそ心をはなくさめける
- 14、いにしへよりかくつたはれるうちにも奈良の御時よりぞひろまりにけるかのおほん世や歌の心をしろしめし  
たりけん彼おほん時におほきみつのくらる柿、本人麻呂なん哥のひしりなりけるこれは君も人も身をあはせたりと  
いふなるべし
- 15、秋のゆふへ龍田川になかる、もみち葉はみかとの御目には錦と見たまひ春のあした芳野山の桜は人まろか心

には雲かとのみなんおほえける

16、これよりさきの歌をあつめてなん万葉集と名つけられたりける

17、こゝにいにしへのごとも哥の心をもしれる人わつかにひとりふたりきしかあれとこれかれえたとこ  
ろ得ぬ所たかひになんある

18、かの御時よりこのかた年はも、とせにあまり世はとつきになんなりにける

19、いにしへの事をもうたをもしれる人よむ人おほからず

20、こゝにいにしへのごとも哥の心をも知れる人わつかにひとりふたりなりきしかあれとこれかれえた  
るところえぬところたかひになんある

21、つかさくらゐたかき人をはたやすきやうなれはいれず

22、僧正遍照は哥のさまはえたれともまことすくなしたとへは絵にかける女を見ていたつらに人のこゝろをうこ  
かすかことし

23、言葉はたくみにてそのさま身におはす

24、宇治山の檀きせんは

25、よめる哥おほく聞えねはこれかれかよはしてよくしらす

26、小野小町はいにしへのそとほりひめのなかなれなりあはれなるやうにてつよからずいは、よきをんなのなやめ

る所あるに似たりつよからぬは女のうたなれはなるへし

27、おほともの黒ぬしはいにしへの猿丸大夫かすかたなりこと業をかしくしてそのさまあにやし

28、「歌とのみおもひてそのさま知らぬなるへし」の次に「さるはちかき世のひとはひたふるにその身のさかえをのみむねとしてふかく哥に心をいれてよむべきものとしもおもひたうてぞすこしにけるか、ればつかさくらゐのたかきあるは富さかえおこれるひともうせぬればその名ほねにさきたちてくちはてて世に知るひとなんあらざりけるしかあるにたまたまにも後世までその名つたはりてよにしられたるは哥人になん有けるそは詞はあまねく人の耳にのこりこゝろはちはやふる神の御心にもゆきかよへばなりけり」を作文補入する

29、かゝるに今すへらきのあめのしたをしろしめす事

30、筑波山の麓よりもしけくまし〜て

31、みふみのところのあつかり

32、万えうしうにいらぬうたともふるきみつからのをもたてまつらしめたまひてなん統万葉集とぞ名つつけられける

33、それかなかにも

34、君をおもひ人をもいはひを

35、逢坂山にいたりて

36、それまくら言葉は

37、かつは人の耳におそれ

38、このうた(マ)もしあるをや

39、哥のさまをもしり事の心をもえたらん人はおほそらの月を見るかことくにいにしへをあふきて今をこひさら  
めかも

以下これらの箇所については香の見解を中心として、先行する国学者たちの改訂案と比較していく。典拠本文は左のごとくである。

古今余材抄（契沖）：新版全集第八卷所収本（昭48刊、岩波書店）

古今和歌集仮名序（荷田春満書）：新編全集第六卷所収本（平18年刊、おうふう）

古今集序註（荷田春満）：同右所収本\*存前半、六義まで  
古今和歌集序釈（荷田春満）：同右所収本

古今和歌集序説（荷田春満）：家藏慶応三年写本\*以上三注をあわせて春満聞書と称することがある

春葉集所収仮名序（伝荷田春満）：寛政十年版本  
続萬葉論（賀茂真淵）：旧版増訂全集第六卷所収本（昭4刊、

吉川弘文館）

古今和歌集打聴（賀茂真淵）：旧版増訂全集第七卷所収本（昭4刊、吉川弘文館）

古今集遠鏡（本居宣長）：新版全集第三卷所収本（昭44刊、筑摩書房）

古今和歌集正義（香川景樹）：明治二十九年訂正再版本複製（昭53刊、勉誠社）\*版本も参照したが、本稿該当箇所では特に問題はない

さて、これらを見ると、『春葉集』所収の仮名序（以下、「春葉序」と略称）や景樹の序正文（以下、「正文」と略称）にならったもの、あるいは影響を受けたものも多い。しかし、その一方で、独特のものも多く、先行の改訂案の延長線上にあると

は言い難い。

もう少し具体的に述べると、正文に一致し、それに拠ったと考えられるものとしては、13 9 11 17 18 19 20 24 34 35の十一箇所が挙げられる。このうち、春葉序と一致するものは11のみであることを考えると、正文の影響は大きいと言えよう。一方、春葉序との一致は、11以外に、23 25があるくらいで、その他は26が類似する程度である。

ただし、春葉序は前稿<sup>15</sup>で取上げた春満の講釈による聞書類とは改訂に違いがある。春葉序は既に指摘されているように、その成立に問題があり、春満の真意に忠実か否か疑問があるが、近世には春満の説として信じられてきた。一方、真淵や景樹は前稿で述べたように、春満の聞書を見ていたと思われるので、それを知らずに春葉序を春満説としている是香の立場は異っていることになる。

次に、具体的な改訂の様を見てみる。まず、先行の改訂に做つたか、影響を受けているものを見る。

1の「ひとのこゝろを」を「ひとつこゝろを」に改めることは、古くは顕昭注が「貫之集二八、ヒトツコ、ロヲタネトシテトアリ」と指摘する<sup>16</sup>のを受けて、春満は「ひとつこゝろを」説

を採っていたが、後年「ひとつのこゝろを」説を採るようになったと考えられる<sup>17</sup>。春葉序も「ひとつの心を」とある。是香は春葉序には従わず、正文と同じく「ひとつこゝろを」としている。

3の「すさのをのみことより」を削除して「人の世となりてぞみそもじあまりひともしはよみける」とするのは、正文よっている。春葉序はもとのままで削除しないが、春満の序註には「人の世となりて三そもじあまり一もしはよみけり」と改め、序説には「人の世と成てもはらみそもじあまり一もしはよみけり」とそれぞれ改めており、正文はそれらを参考にしたものであろう。

8に「むつにはいはひうたといへることのたくひなるべし」とするのは、通行本に「むつにはいはひうた」とあるところである。ここに、字句を加えるのは、春満が考え出したものである。六義の例歌を後人の所為として削除したため、例歌の末尾の「といへるなるべし」まで削除せざるを得ず、「むつにはいはひうた」から直ちに「今の世の中」と続くのが不自然として、「むつにはいはひうたなり」とするのである<sup>18</sup>。これは正文にも採用されている。これに対して、是香は建久本の体裁と本文を参考にして、上記のような改訂を施している。

おほさ、きのみかたとを云ミといふ端書をはじめ次ミ挙たる哥どもは既に加茂翁の論定せられしことく纒入の文なりそは建久本にも此證哥のみは入たれども其を挙げられつるさまそのむくさのひとつにはそへ歌とありて少し欠字しておほ

さ、き云ミといひまた別行に難波津にといふ哥を挙て「といふなるへし」と記し又別行にふたつにはそへ歌とやうに次ミも如此挙もてゆきてとちめにむつにはいはひ歌「このとは」といふ哥を挙て少し欠字して「といへる事のたぐひなるべし今の世中いろにつき」云ミとつゞけたりか、れはおほさ、きのみかたとをそへ奉れる歌といふより次ミ古哥を挙たるはいづれも纒入の文なる事よく知られたりさてとちめに「といへることのたぐひなるべし」と置たれば上なる六の目目をさしたるにて證哥にて挙たる歌をさしたるにはあらず能誦味ひて曉るべしか、れば建久本に依ときは本文と纒入の文とはいとよく分別れて本の正しかりつるさま知られたり

是香は建久本には六義の箇所最後の、「といへることのたぐひなるべし」とあるのを生かしている。確かに定家本では「といへるなるべし」とあるのが清輔本では「といへることの

たぐひなるべし」となっている。また、是香が建久本では古注は頭脚に置いていたが、六義の證歌のみは本行に入れ、別行とされている、また、「といへることのたぐひなるべし」も本行に存すると指摘しているのは重要である。

9は「花をそふとて」がわかりにくいとして、春満聞書や春葉序が「花をこふとて」と改め、真淵、宣長もそのようにするのに従わず、正文が「花をもてあそぶとて」とするのに従っている。但し、後拾遺集の序を参考にして「花をもてあそぶとて」の誤りとする説は、本稿末尾に（参考）として掲げた荷田蒼生子跋にも見えており、比較的早くから存在したらしい。

11で「きのふはさかえおこりてけふは時をうしなひ」と「けふは」を補つて対句とするのは正文と同じである。

17から20に到る大改訂はほぼ正文に拠っている。この箇所17の「こ、にいにしへのことをも哥の心をもしれる人わつかにひとりふたりなりきしかあれとこれかれえたるとこ得ぬ所たかひになんある」と19の「いにしへの事をもうたをもしれる人よむ人おほからず」と重複的記述があるのを共にこの箇所から削除し、18の「かの御時よりこのかた年はも、とせにあまり世はとつきになんなりにける」の次に、20「こ、にいにしへのこと

をも哥の心をも知れる人わつかにひとりふたりなりきしかあれ  
とこれかえたところえぬところたかひになんある」として  
17を挿入する。結果的に19は削除される。以上は正文と同じで  
あるほか、「も、とせあまり」を「も、とせにあまり」とする  
のまでそれに従っている。

実はこの箇所既に余材抄に改訂案がある。契沖は改訂せよと  
言うのではなく、このように言うつもりなのであらうとしてい  
るのであるが、次のように述べている。

上にいにしへのことをもうたの心をもしれる人わつかにひ  
とりふたりなりきといひて、今またかさねてかやうに  
（「いにしへの事をもうたをもしれる人よむ人おほからす」  
とある、稿者注）いへる事おほつかなし。下に至りて、又  
哥のさまをもしりこと心の心を得たらん人はといへり。あま  
りにおなし事の重畳せるは、若今は衍文などにや。語脈の  
連続をいは、かの御時よりこのかた年はも、とせあまり  
世はとつきになんなりにけるこ、にいにしへのことをも哥  
のこ、ろをもしれる人よむ人おほからすわつかにひとりふ  
たりなりきしかあれとこれかえたところえぬところた  
かひになんある今この事をいふにとありぬへきやうにおほ

ゆるにや（岩波版全集50頁）

つまり、17と19を該当箇所から削除する点は同じであるが、  
18の次は、17そのままではなく、削除した19から「よむ人おほ  
からず」を拾って生かしている。

次いで、宣長の遠鏡は余材抄と同様の削除と移動をし、「よ  
む人おほからす」を拾わない。つまり、正文、是香に引継がれ  
る形となる。

これとは別に春満はこの辺りは多く後人の筆と断じて、大幅  
に14 18 19と削除する。従って、この間に残った17は移動する  
必要すらなくなる。これは春葉序も同じである。

さて、是香は遠鏡、正文に従いながら、以下のように述べる。  
是香の先学への認識がうかがえるので、長いが引用する。

此一章（こ、にいにしへのことをも哥の心をもしれる人  
わつかにひとりふたりなりきしかあれとこれかえたと  
ころ得ぬ所たかひになんある」の部分、稿者注）諸本とも  
に此処に入たるは次なる一章と後に前後に入られたるなり  
鈴舎翁が其錯簡たる事を考訂して此処なるを削りて次章の終  
につ、けられしは実に動くましき考なり既に契沖か余材抄  
にも奈良の御時哥の盛にて万葉撰まれたるよしいひて衰へ

たる故をいはず俄にこゝに古への事をも哥の心をも云々と云る事おほつかなし」と論ひつるはさすがの法師にてよく心付りし事なりされとも錯乱とまでは心付さりしを鈴舎翁かく訂されしはこよなき功には有ける然るを正義に公然としてこれを掠めて正文として其本注にも驕かに云置つるは傍痛き事になん

是香は景樹が宣長の功を奪つたと非難するのであるが、余材抄に言及しながら、それに一種の改訂案があることには触れていない。

23は「言葉はたくみにして」の「は」を削除したもので、春葉序に拠つたとする。但し、春満聞書では「は」はないものの、特に削除したとは言わないので、意図的か不明である。また、序説は、「是をもて考ればことはたくみにしてそのさまにおはすと有しにや」と改訂案を示す。

24で「宇治山のきせんは」と「僧」の一字を削るのは正文と同じ改訂である。是香は言う。

山字建久本為本などには無く僧字難波本には無し今これを参考するに宇治とのみにては其里と聞ゆるを此僧の栖りし地は謂ゆる喜撰か嶽にして深き山なれば必山とは有へく僧

なる事は云も更なれば難波本によりて僧一字を削るべくこそ

是香は建久本に「宇治山」の「山」の字がないとするが、確かに清輔本にはない。また、為本も同様とする。

なお、「為本」は注(6)に述べたように、小沢蘆庵が「為本」として校合する本を是香が引用するもので、性格は不明であるが、清輔本に近いようである。

また、難波本には「僧きせん」の「僧」の字がないとするが、唐紙卷子本には「宇治山の基檀」とあり、確かに「僧」の字はない。

25の「よめる哥おほく聞えねはこれかれかよはしてよくしらす」の削除は春葉序と同じであり、春満聞書も同様に削除すべしとする。是香は次のように言う。

○分注は例の旁書なる事上に弁つるかごとくなるをよめる哥以下も此旁書しつる人の同し旁書なりしか後に本文に纒入しつるものなりされは榮雅卿の抄本によめる以下よくしらず」といふまですべて無きはさる善本のありつるなるべし東麻呂もはやく心つけりしと聞えて省き棄つるはさる事にこそ



「榮雅卿の抄本」とは是香が非定家本と考える本で、是香は「飛鳥井榮雅卿の抄本世に榮雅抄といふ印本にはあらず写本にて伝はれる本なり」と説明する本で、「雅本」などとも称しているものである。但し、この本は注(6)に述べた正義書入では「雅章抄」とも呼んでいて呼称に混乱がある。

なお、この部分正文は削除しない。

26の小野小町の箇所で、「いにしへのそとほりひめのなかれなり」と「つよからぬは女のうたなれはなるへし」を削除するのは、春満の改訂によっている。春葉序も同様である。是香はさらに「あはれなるやうにて」を「あはれなる哥にて」と改める。一方、正文はこれらとはかなり異なつた改訂をする。先行注が削除する二箇所の中、「いにしへのそとほりひめのなかれなり」は削除するが、「つよからぬは女のうたなれはなるへし」は削除しない。その代り、「あはれなるやうにてつよからす」を「そのこゝろあはれにてすかたつよからす」と改訂する。この辺りいずれにしても諸注大きく改訂する。

27の相伴黒主の箇所は、春満が不審を唱えたのが初めて、改訂が始まった。序説には以下のようにある。

そのさまいやしとはかりは前文の例にて見れば落文有と覺

ゆすへて得失をいひ来れるにこれには失のみ云り真字序に頗有逸興而甚鄙也と有を弁ふへしたき、おへる山人は賤き喩へなり花の陰に休めるといへる艶なる所有を云なり

春満は長所を言わないのはおかしいと述べるのみであり、春葉序もとのままであるが、正文は「大伴のくろぬしは。こゝろおかしくて」そのさまいやし」と「こゝろおかしくて」を補っている。これは既に遠鏡が本文を「大とものくろぬしは。こゝろおかしくて」そのさまいやし」とし、訳には「オモシロイ所ガアツテ」を補つた先例がある<sup>20</sup>。是香のは一段と踏み込んでおり、真名序の「古猿丸大夫之姿也、頗有逸興而体甚鄙也」の和訳を試みて「いにしへの猿丸大夫かすかたなりこと葉をかしくしてそのさまいやし(但し、「いやし」は後述の理由で、「あやし」に改訂)」とひとまずした後、前半の「いにしへの猿丸大夫かすかたなり」は纒入として削除し元に戻している。この不可思議な行為は先に述べた是香の仮名序と真名序の成立論から来るものである。つまり、現行の仮名序は傍書の纒入などがあり問題が多く、後人の翻訳であるが、現行仮名序より原形に近い時点を反映している真名序を参考にすべしとするのである。その考えに基づいて作成したのが先の文であり、さらに前半は、真

名序が作成された時点で既に仮名序に繰入していた部分なので、採用しないとする。この論法は、先の小野小町の箇所「いにしへのそとほりひめのなかれなり」にも用いられていて、真名序に「古衣通姫之流也」とあっても繰入として削除している。

もとより、これは現代では通用しない説であるが、当時の考え方として興味があるので、左記に引用しておく。

黒主とはある下に今補ひつる文ともは真字序に大友黒主之歌古猿丸大夫之姿也頗有逸興而体甚鄙とあるはもと此序に今補ひつるか如き文の有つるを原として漢文には訳しつるものなる事上小町か下なる仮字序真字序に参考すれば少しも疑ふべきにあらす然るを其脱しつる文の中に「いにしへの猿丸大夫かすかたなり」といふ十五字はこれも小町か下に述るか如く旁書の繰入の文なれば姑く補ひつるものから削棄べき事は云までも更なりかくて此十五字は元繰入の文なれば無も可けれと此文を脱すとてなくては適はざる「言葉をかしくして」といふ八字をも共に脱しつるものなれば今は真字序の頗有逸興とある文を再び訳し出つるなり遠鏡にも黒主か下に詞落たるよしに驚かしおかれつるは則これらの詞をさしていはれつるにて正文には「心おかし

くして」といふ六字を新補したりそれも悪からねと逸興といふはもはら詞の上に係れる意と通えたれば「詞」といはんかた宜しかるべし正文にはをかし  
仮字たかへり

なお、「いやし」を「あやし」と改めたのは、建久本によつたものであるとするが、現行清輔本で「あやし」とする本はない。

34 「君をおもひ友をいはひ」と「人をも」を「友を」と改めるのは、正文と同じである。但し、是香は正文に触れず、「○友をいはひ今本人をもとあれと建久本為本難波本などに友をとあるに従ふへし」と言う。清輔本、唐紙卷子本いずれも「友を」である。

次いで、35 「逢坂にいたりて」と「山」を削除するのも、正文と同じであるが、是香は「これも上の三本に無きによりて削るべし」とする。これも、清輔本、唐紙卷子本いずれも「山」はない。

36 の「それがし言葉は」はもともとは「それまくら言葉は」とあるところで、意通じがたく、古来議論が多い。

春満は「それまら言葉は」の誤写とする。序説は意は通ずるものの、この辺り欠字が多く、示すに適當でないので、序釈

によれば次のようにある。

枕詞はくのことくろの字有つらんを、写生のくと心得て書  
たかひたる故、いままくらといふなるへし、是等は論すへ  
さほとの事にもあらず、まると皆人心得へきなるを、いか  
なる事にかさまくの論ありけん

春葉序も同様「それまろら言葉は」とする。真淵の統萬葉論、  
打聴も同じである。

これに対して、遠鏡は「まろら」を退けて、「われら」か  
「それがしら」いずれかの誤りであろうとして次のように注す  
る。

おのがをしへ子なる、三井ノ高蔭がいはいはく、まくらは、わ  
れらを写し誤れるなるべし、われ〔王礼〕を字母とする  
平仮名、稿者注〕とまく〔末九〕を字母とする平仮名、  
稿者注〕と似たり、同じ貫之の大井川ノ序にも、われらみ  
じかき心の云々、後拾遺集ノ序にも、仰せをうけ給はれる  
われら云々、伊勢が長歌にも、涙の色のくれなるは、われ  
らが中の時雨にて云々、とありといへり、横井ノ千秋も、  
われらなるべしといへり、又或人はいはく、それまくらは、  
それがしらの誤なるべし、おのがことを、それがしといへ

ることも、中昔の文に例ありといへり、今思ふに、此ふた  
つのうちなるべし、まろらの誤とするはわろし、まろとい  
ふは、無礼マドクき語に用ひたる例なれば、此序などに、いふべ  
きにあらず、

景樹は正文に「それ枕詞は」を「われら拙き言葉は」と改め、  
正義に次のように説く。

難波本にはつらゆきことのは云ミとあり此つらゆき言のは  
は決めてつたなきことはの写誤なるへし頭注にも江本には  
つらゆきらと書り或本にはつらゆき丸と書りといへりかれ  
これをかよはして考るにわれらつたなきと有けるかわれら  
つらゆきとなりさてはことわり立ねはそれまくらなとやう  
やくに転せる也

ここで、「難波本にはつらゆきことのは云ミとあり」と言う  
が、唐紙卷子本には「貫之ことのはに」とあつて、一致してい  
る。なお、打聴の仮名序に「貫之筆」として引用する本は唐紙  
卷子本に一致し、難波本と同一本と思われる。

これらを受けて是香は「それがしら言葉は」説を採る。以上  
の諸家の経緯を繰返すようであるが、是香の思考をたどるため  
やや長く引用する。

それかしら今本にはそれ枕言葉とはあり顕昭か序注に江本にはつらゆきと書り或本にはつらゆき丸とかけりといひ打聴正義などに引る難波本にはつらゆきらとあるよしに見え都の角倉氏に持伝られし古写本の古今集にもつらゆきらとあるよし吉田玄孝語られき然るをまくらとつらゆきとはいたく異なるさまなるをいづれにしても此処には似つかはしからずそは枕言葉とあるはむげに文義通えずつらゆきらとあるも引つらなきにありたる下文につらゆきら此世に云とあればしか重複て我名を挙へるにありされは古来此序中第一の難義として釈わつらひ来つる事にはあれと然むつかしき事にはあらず難波本の真蹟に就て見ればそれ閑之らとあるは閑之らを引連ね縮て書るに世に伝はれる貫之てふるき筆跡にはかくさまに書るも例多かる事なり道風さては行成後頼などの書ともを見集めたらん人はおのつから悟りぬべし然るを其閑之らを満久らそと見つる人はまくらとかき貫之と読つる人はつらゆきとかきつるにて遂二様とは成つるなり難波本は古く貫之が自筆なりと云伝は後頼なりとも或は公任卿そ其子の定頼卿そなともいへりさて其難波本かきつるは誰にもあれ実たれと此ころの古筆の鑑定家の説には此ところ読取かたくおほえしかば努て元本の字体を存して写し取つるものと察られたり上代の仮字に閑字之字を多く用ひたるを見たらんには如此混ひぬへき事は悟ぬへし是香は顕昭注に言及するが、現行顕昭注の「まくら言葉」に

関する部分は、本文に問題が多い。最善本と考えられる内閣文庫本（二〇〇—一三）においても不審があり、以下のようである。

教長卿注云、夫マクラ詞トハ常詞也、枕造幣ナトハ、常ニ手ナラス物也、(中略)

今注云、某丸等ヲ、夫マタラト云慥歟、十三各序ニ臣等トカケル同心也、注本ニハ、ツラユキヲカケリ、或本ニハ、ツラユキ丸ヲカケリ、皆同心歟、

この本文はなほだ通じ難いが、多くの本は同様である。群書類従本は「マクラ」が「マクラ」、「十三各序」が「真名序」、「注本」が「江本」とあつて通じる。校訂の疑いもあるが、恐らくはそうあるべきところであろう。真名序に「臣等」とあることから、それに「まくら」の意味を推当てて考えるのはこうして顕昭に始まる。この説は、古いところでは為家序抄や六巻抄にも見え、六巻抄は「金吾（基俊）説トテ、マクラトハワレラトイフ詞也ト被申キ。」と藤原基俊の説とする。両度開書もこの線上にあり、伝統的解釈はまずこの辺りであつた。従つて、春満の「それまら言葉は」は顕昭注にその着想を得ていることになる。

余材抄は結果は同様であるが、根拠が異なる。

まくらは文選孔融薦祢表に臣等をまくらと点せり。ことは言歟今案むなしき名のみといふに隔句に対すれば、猶此上にたとへははかなきつたなきなといふやうの詞のあるへきを落たるにや。

景樹の「われら拙き言葉は」は余材抄に着想を得ていることになる。

また、文選に「臣等」を「まくら」と訓ずるといふ指摘であるが、是香は「まくら」という訓はこの推当てから生じたもので、そのような古語はないとする。先の引用の続きに次のように言う。

然るを古くよりこの閑之を満久と読誤りつるたにあるを此処の真字序に臣等と訳せるに比考してそれかしらを漢文に臣等と訳せるはこの文にはよく宛れまくといふは臣といふ義の古言ぞと誤心得してまづ真字序の臣等とあるをマクラと訓点しつるか起元と成て遂古 事記の旧印本文選などに臣等とあるをもマクラと訓点しつるからまた近世に及ては却てその文選などの訓を引出て此序を釈の徴証としたる解なども聞えたるは謬に誤を重ねつるものなり中古以来の人の古語を解つるにはかゝる筋の

失誤外にも例あり事の本末をも訂正さる識者の説にはかゝる当無き事なん多かりける

これは見識と言つてよい。

しかし、是香が難波本（唐紙卷子本）の真蹟には当時一般に言われるように「つらゆきら」とはなく、「それ閑之ら」とあるとして、その二字を「満久（まく）」「貫之」と読むのは「閑之（かし）」の誤りであるとするのは、是香の見た難波本にはそうあつたのかもしれないが、唐紙卷子本を見ると「貫之」とのみあり、「それ」も「ら」もなく、従つて論として成立し得ないように思われる。

ともあれ、解し難い「それまくら言葉は」を諸家があれこれ解釈するのを順に見ていくのは、当否は別として、なかなか興味深い。

### 三

以上は、是香の改訂の中、先学の説に拠るか、大きく影響された箇所である。以下は是香独自と言つてもよい箇所を挙げる。

2の「世につたはれることは」と「れ」を補うのは、建久本によるとする。確かに、清輔本には「つたはれる」となつてい

る。

4の「天雲のたなひくまでおひのほれることくなるべし」とあるのは、「天雲の」と「の」を補い、一方、「おひのほれる」の次の「にこのうたもかくのことく」を削除している。是香はこれらはいずれも建久本に拠ったとしている。但し、現行の清輔本はいずれも通行本と同じで、そうなっていない。

5を「難波津の歌はみかとおほんはじめよみてたてまつれるなり」として「よみてたてまつれる」を補うことについて、是香は次のように言う。

今本よみてたてまつれる」の九字脱たり難波本に此九字存るに從て補ふべし建久本にはおほんはじめのはしめなり」とあれとわろし今本の如くにては何事とも其義通えかたし

既に述べたように、難波本は唐紙卷子本かと思われるのであるが、ここでは唐紙卷子本は通行本と同じで、是香の記述と一致しない。また、建久本の指摘も現行の清輔本と一致しない（清輔本は通行本と同じ）。

6の「浅香山のこの葉はうねめのたはふれよりよみつるにて」と「つるに」を補っているのは、是香の私案で「○よみ

つるにて諸本よみてとあれとさては語調<sup>ゴトヨシハ</sup>ず是処<sup>コ</sup>は必よみつるにてとあらされは適<sup>カタハ</sup>ざる処なれば私に加<sup>ヘ</sup>つ善本世にいでは必此三字あるべし」（頭注補入部分）とある。

7で「そもミ歌のさまむつなりから歌もかくぞ有べき」と「からの歌にも」を「から歌も」と改め、次のように述べる。

の、字にもじ共に建久本に無きに依<sup>レ</sup>て削るべしこ、は必ずはりたる語を置へきところなればなり

このところ清輔本は、下の「に」はないが、上の「の」は宮本家本のように無い本もある（「のイ」とする）が、普通は存する。

10の「うたをいひてそなくさみける」と「なくさめ」を「なくさみ」とあらためるについては是香は、「○なくさみける諸本なくさめけるとあれどこ、は自躬<sup>ウラミタリ</sup>なくさむ事にて人をなくさましむる意ならねは建久本にみとあるに従ふべし」とする。但し、現行清輔本に「なくさみ」とする本はない。

この改訂について、近藤芳樹は頭注して「芳樹云、哥をいひてわか心をなくさむることなればなくさめとあるか正しきなり」とするが、もつともである。

12は「野中の清水をくみ」と「しみつ」の「し」を補ったも

の。是香は「○野中の清水清<sup>じ</sup>もし諸本に無きは脱たるなり建久本為本などに清水とあるそ本歌の詞にも符<sup>カフ</sup>ひてよろしき」とする。確かに清輔本は「しみつ」である。

13の「なからの橋もつくるなりとさくにも哥にのみそ心をはなくさめける」は通行本に「さく人は」とあるのを「さくにも」と改め、「心を」とあるのを「心をは」と改めたものである。

是香は前者について「○聞にも今本さく人はとあれと為本にかくあるそ宜しき」とする。但し、この箇所「さくにも」とある本なし。なお、注(6)紹介の国会本・斯道文庫本には「さく人は」とし、さらに左に「為イ」として、為本は「さくにも」で、「人は」の異本注記があることを示す。後者は「○心をは」ばもじ諸本無し建久本為本などには<sup>じ</sup>もじのあるに従ふべし」とする。確かに、清輔本には「は」文字がある。

14の「いにしへよりかくつたはれるうちにも奈良の御時よりぞひろまりにける彼おほん時に柿本人麻呂なん哥のひしりなりける」と改めた部分は柿本人麻呂を「おほきみつのくらゐ」とする他、「これは君も人も身をあはせたりといふなるべし」も解しがたく、本文に疑問が多い箇所である。従つて、国学者たちの改訂も多い。

まず、是香は「かくつたはる」を「かくつたはれる」に改める。そして「つたはれるれもじ諸本なし難波本東麻呂か本にかくあるに従ふべし」とする。確かに、唐紙卷子本には「れ」文字がある。春葉序も同じである。また、春満自筆の仮名序にも「れ」がある。但し、春満聞書類(序釈、序説)には「れ」を特に補わない。

その次を大幅に削除するのは、春満に始まる。序説は次のように言う。

此所の文段第一にとりあはずその上かのおほん時といひ又かのおほん世やと同じ詞をつ、けおほきみつの位と物に見えもせぬ位を書かへたるは後人の所為うたかひなし今案に是はいにしへよりかく伝るうちにも柿の本の人丸なん哥のひしりなりけり<sup>マツ</sup>と連続の文義なる事明らかなり

この点は春葉序も同じである。また真淵の続萬葉論、打聴も同様である。

一方、正文は比較的改訂が少なく、「おほきみつのくらゐ」を削除し、代りにそこに「あひて」を入れる。

これに対して是香は三箇所を削除する。つまり「かのおほん世や歌の心をしろしめしたりけん」「おほきみつのくらゐ」「こ

れは君も人も身をあはせたりといふなるべし」の箇所である。是香は次のように言う。

○かのおほん世や以下廿字またおほきみつのくらるといふ九字其次なるこれは君も以下廿一字は共に例の旁書のや、後に纒入しつるなり其は人麻呂を平城天皇の時の人そと思へるは貫之が不明なるには違ひあらされども平城天皇は殊に漢学を好ませたまひ御哥はいと稀なつては聞えざるを此帝の哥の意を知しめし、とはいかにしてもいひ難く殊に今本の如くならんには斯ばかりの短文の中に御時御世などいふ事の三まで重りたるもあまりしきまで煩らはしく拙き書さまにはあらずやされは貫之か他し大井川ノ序土佐日記などに考合するにかはかり拙き文かくべき人にもあらず（中略）か、れは上件の纒入の文ともはいつれも削棄たるぞ貫之か真面目には有けるされは真字序を訳しつるころはいま此纒入は無かりしかはこれらの文すべて真字序には訳したる文ある事無し心を深めて事のみたれを按ひ悟るべし

このように「おほきみつのくらゐ」を纒入としながら、是香は公任の金玉集序に「同御時有三正三位柿本人丸者」とあることを指摘し、「今の纒入本に拠て書れしなれば当時既に此誤は

有つるなり」としている。

15 「秋のゆふへ龍田川になかる、もみち葉はみかとの御目には錦と見たまひ春のあした芳野山の桜は人まろか心には雲かとぞおほえける」の前半は小さい改訂で、「もみちをは」を「もみち葉は」と改訂し、「御目には」は「は」を補っている。前者は私案、後者は「芦庵か校合本の中なる一古本」に拠るとする。また、「雲かとのみなん」を「雲かとぞ」に改める。是香は「○のみなん此四字建久本為本などにぞとあるそ宜しき」と言う。確かに、清輔本は「雲かとぞ」である。

16 「か、りけるさきの歌をあはせてなん万葉集と名つけられたりける」では「これより」を「か、りける」に、「あつめて」を「あはせて」に改める。これらはともに建久本、為本に従うとある。やはり清輔本にはそのようにある。

21 「つかさくらゐたかき人」の「人」を削る。そして、「人字建久本為本などに無きそ宜しき其は上に「哥の心をも知れる人云々」とあるをうけて「今此事を」と云出つる文なればつかさくらゐ高きといへる則其人なる事いふも更なればなり」とする。清輔本は「人」なし。



22 「花山」遍照は哥のさまはえたれともまことすくなしたとへは絵にかける女のいたつらに人のこゝろをうこかすかことし」とするのは、「僧正遍照」を「花山」遍照」に、「絵にかける女を見て」を「絵にかける女の」にそれぞれ改め、「いたつらに」の次に「人の」を補う。是香は次のように言う。

今本僧正遍照とあれと建久本為本などに僧正の二字無く昭を照と作るなど共に宜しければこれに従ふべし其はこゝに挙たる人ゝ何れも位階は拳さる例なるを此僧に限て拳へきにあらされはなりされとも次々に拳たる人ゝの姓をつらね喜撰にも宇治山とある例に依はこゝも元は華山」遍照とありつるなるへしさてこそ真字序に華山僧正とあるはやかて其元本に華山とありしを其まゝに用つるなるべけれ

是香は建久本為本には「僧正」はなく、単に「遍照」とあるとするが、清輔本は確かに「僧正」はないが、「へんせう」または「遍昭」で、「遍照」とは無い。また、国会本、斯道文庫本による為本も同様である。

「絵にかける女を見て」を「絵にかける女の」に改めたことについて、左記のようにある。

○絵にかける女を見て上の二本（建久本為本、稿者注）に

は女をおもひてとあれどそれも今本の女を見てとあるも其後に誤れるにて女のなるべしそは或人の説にこゝに譬つる趣しほめる花の色なくて商人の云みあかつきの云よき女の云み薪おへる山人の云みといつれも其譬に採つる彼方のものゝ上に就ていへるを此遍照にのみ絵にかける女を見てと此方に就ていふべき謂あらざればなりされはもとは絵にかける女のいたつらに人の心を」とありつるを後に誤脱しつるものなるべし」と云るは実にさる事なり

清輔本はこの箇所「おもむなをおもひて」とある。

ところで、この箇所、近藤芳樹は頭注して、「芳樹 このこと余もまた歌かたりに證をあけていへり西田直養も此説ありかく三人同説なるは更に疑をいるべきにあらずこれに従へし」と贅意を表する。是香の改訂に概して批判的な芳樹としては珍しい。

さて、以上を見ても是香の説は独自かつ特異なものが多いことが判るが、それが尤も極端に現れたのが28である。つまり「歌とのみおもひてそのさま知らぬなるへし」の次に「さるはちかき世のひとはひたふるにその身のさかえをのみむねとしてふかく哥に心をいれてよむべきものとしもおもひたらてぞすこ

しにけるか、ればつかさくらゐのたかきあるは富さかえおこれ  
るひともうせぬればその名ほねにさきたちてくちはてて世に知  
るひとなんあらざりけるしかあるにたまたまにも後世までその  
名つたはりてよにしられたるは哥人になん有けるそは詞はあま  
ねく人の耳にのこりこ、ろはちはやふる神の御心にもゆきかよ  
へばなりけり」と作文して補入する。その理由を是香は次のよ  
うに述べる。

此は真字序に俗人争事<sup>テトシ</sup> 荣利<sup>ヲ</sup> 不用<sup>ヒ</sup> 詠<sup>スル</sup> 和歌<sup>コトヅ</sup> 悲<sup>ヒカナ</sup> 哉<sup>ナ</sup> 雖<sup>キコト</sup> 貴<sup>キコト</sup>  
兼<sup>ネ</sup> 将相<sup>ヲ</sup> 富餘<sup>スト</sup> 金銀<sup>ヲ</sup> 而<sup>モ</sup> 骨未<sup>セ</sup> 腐<sup>チ</sup> 於<sup>ニ</sup> 土中<sup>ニ</sup> 名先<sup>ニ</sup> 滅<sup>ス</sup> 於<sup>ニ</sup> 世上<sup>ニ</sup> 適<sup>ニ</sup>  
為<sup>ニ</sup> 後世<sup>ノ</sup> 被<sup>レ</sup> 知者<sup>ヲ</sup> 唯<sup>ニ</sup> 倭歌<sup>ノ</sup> 之人<sup>ニ</sup> 而已<sup>ハ</sup> 何<sup>ト</sup> 者<sup>ト</sup> 語<sup>レ</sup> 近<sup>ク</sup> 人<sup>ノ</sup> 耳<sup>ニ</sup> 義<sup>ハ</sup> 慣<sup>ナリ</sup>  
神明<sup>ニ</sup> 也<sup>ト</sup> あるは必假字序に有つる文を訳しつるには遠<sup>ヒ</sup> 違<sup>ヒ</sup> じ  
らざるを諸本ともに此語とも無きは後に脱しつるものな  
ること疑<sup>ツ</sup> 無<sup>ク</sup> ければ彼漢文をふた、ひ訳し出つるなり文の連<sup>ッ</sup>  
続<sup>キ</sup> はいか、有けん知るへからされともそのおほよそのあり  
さまはかゝるさまなりけんとおほゆるかしそもく上<sup>ニ</sup> に  
も論<sup>ヘ</sup> へることく假字序の元本と真字序の元稿とは元より前  
後の奏覽本の遠<sup>ヒ</sup> ありつる事と通<sup>キ</sup> れは此章も假字序の本には  
元より無かりしにやとも思へど序中に就て貫<sup>キ</sup> 之<sup>ノ</sup> 心裏<sup>ヲ</sup> を考  
渉<sup>ス</sup> ず<sup>ニ</sup> 此一章の論ひは必<sup>ズ</sup> なくてはえあらぬ事のいきほひな

れは尚後に脱しつるものなるへし（中略）尚いは、此一章  
は序中の眼目とも云へき要文なれば貫<sup>キ</sup> 之<sup>ノ</sup> 心裏<sup>ヲ</sup> とは決<sup>メ</sup> て省<sup>キ</sup> き  
棄<sup>テ</sup> ましく思ゆれば其文意をたにとてかくは訳し出つるなり  
このやり方は現代の観点から見れば論外であるが、近藤芳樹  
も批判して頭注する。

芳樹云此文真名序を訳したるはさることながら本文の闕を  
補はんとせらる、はいか、あらんすへて異本を以て校正す  
ることは勿論ながら私に文を作りて補ふなとやうのうけは  
りたるわさはまつはすましき事とこそおほえ侍れは大学の  
闕文を補へるため（しなとも）なきにあらねとかれは宋の  
大賢なり吾徒古学をせんにはた、ありのま、をのみ伝へて  
闕文にやとおほゆる所は疑をのこし考へをしるしおくはか  
りこそしからめしかしなから人の心人のおもてのことくお  
のかさまくなればしひてと、むるには侍らすた、忠告す  
るのみ但哥人になんありけるの哥人の字は改めまほし詠哥  
の作者を哥人といふことふつになしともあらねと哥人と  
いへはおほくは哥うたふ人となることなれば也

是香の手法は他の国学者があまり触れない文献にまでしばし  
ば及んで、合理的な考証を行おうとするところに特徴があるの

であるが、この仮名序の改訂については、そのことがかえって災いしている感がある。こうなると、かつて拙著で「是香の校合作業や『古今集撰續考』以下の著作を見ると、平田派国学の関西の棟梁と言われた是香には、手堅い考証家の一面があったことが見てとれる」と述べたのを撤回したくなる。

29は「かゝるに今すへらきのあめのしたをしろしめす事」と「あめのしたを」の「を」一字を補う。是香は「○天下ををもし諸本脱たり建久本為本によりて補ふ」とする。清輔本「を」を存する。

30「筑波山の麓よりもしけくまし／＼て」は通行本に「おはしまして」とあるのを改める。

○まし／＼て諸本おはしましてとあるを今は建久本為本なとにまし／＼てとあるによれり

このところ清輔本は「おまし／＼て」「まし／＼て」ではない。あるいは是香の見誤りか。注(6)に述べた国会本にも「しけくおはしまして」とある。但し、斯道文庫本は「まし／＼て」の傍書が国会本よりやや上にあり、「まし／＼て」と見えなくもない。

31は「みふみところのあつかり」と「みふみの」の「の」を

削除して、「御書」の諸本のもじあれど建久本為本などに無きによりて削るべし」とする。清輔本は尊経閣本、宮本家本などは定家本と同じく「みふみのところのあつかり」とするが、穂久邇文庫本、顕昭本などは「みふみのあつかり」である。建久本と同じ本文の本はない。なお、国会本、斯道文庫本は「御書のところのあつかり」とある。

32の「万えうしうにいらぬうたともふるきみつからのをもたてまつらしめたまひてなん続万葉集とぞ名つけられける」となっている箇所も改訂が多い。

まず、「万えうしうにいらぬふるきうた」を「万えうしうにいらぬうたともふるき」と改める。そして、「○哥ともふるき今本にはふるきうたとのみあるを建久本には「うたふるき」と見え為本には「うたともふるき」とあり為本のかた宜しければこれに従へり」とする。清輔本は為本と同じで、建久本のように「うたふるき」とする本はない。なお、この箇所は改訂の理由が今一つ不明確である。

次いで「たまひてなん」の次に「続万葉集とぞ」以下を新たに加えている。是香は左の如く言う。

○なん建久本為本などに此二字無し(清輔本「なん」なし、

稿者注)按ふに真字序に詔云々等各献家集并古来旧歌一  
曰「統萬葉集」とあるに依るに此なるとある下には必「統萬  
葉集と名つけられける」と有けんを後に脱したるかはた文  
粹に出たる真字序には曰「統萬葉集」の五字見えす建久本の  
イ校に無「此五字」といふ旁書も見え徳治のころか、れし叶  
雲法師か書テの真名序にも無きは何れも文粹に拠れつるもの  
なればなるべしけれども漢文の方に執ては此五文字ありては  
引つ、きて古今集の事に及て同じ趣重複キカサナリていさ、か煩はし  
ければ省ける本も有つるによりて此序なるも後に省き棄つ  
るなるべししてしか省くに付てはなんといふ辞の取りかた  
きま、に彼本ともには此二言をも共に棄つるなるへし  
こころも真名序によつて文を作っている。

33は「それかなかに」と末尾の「も」を削除している。是香  
は「中にももし為本に無きによりて削るべし」とする。本来、  
この「も」は清輔本はもとより、古い定家本にもない。但し、  
版本にはあるので、それを底本とした是香は「も」を削除して  
いる。なお、この箇所について、伝嵯峨本や正保版本など近世  
の版本が古い定家本と異なる事をおつて指摘したことがある。  
37の「かつは人の耳におそれ」は「おそり」を「おそれ」に

改める。是香はこう言う。

○おそれ今本におそりとあるもわろしといふにはあらされ  
と此序にとりては建久本におそれとあるかたまさりぬへし  
清輔本「おそれ」とある本なし。

38の「このうたもし」は通常「このうたのもしあるをや」と  
あるところである。是香はこう言う。

此哥もしの下今本あるをやの四言入たるは行文なり難波本  
に無きによりて削るべし

「あるをや」は唐紙卷子本にのみない。但し、「このうた」の  
下の「の」がないのは、是香は特に言わないが、唐紙卷子本に  
従つたものであらう。諸本には存する。

39の「哥のさまをもしり事の心をもえたらん人はおほそらの  
月を見るかことくにいにしへをあふきて今をこひさらめやも」  
は「事の心をも」と「も」を補い、「こひさらめかも」「こ  
ひさらめやも」に改めている。是香は言う。

○さまをも心をも此二のもの、じ建久本難波本共に無きは脱  
たるなり心をもものは今本にも脱たるを榮雅卿の抄本打聴  
本などに依りて補つ○さらめやも今本かもとありそれもわ  
るからねと建久本にやもとあるかたおたやかにてよろし

「哥のさまをもしり」の「も」について建久本、難波本にな  
いと述べるが、確かに、清輔本、唐紙卷子本には「も」がない。  
また、「こひさらめやも」が建久本に「こひさらめかも」とあ  
るとするが、現行清輔本でそのように作る本はない。

以上は是香が本文を改めている箇所であるが、改めてはいな  
いがこうあつた方がよいと言っている箇所がある。それは次の  
箇所である。

花になく鶯水にすむ蛙の声をきけば

これについては是香は言う。

○さてこ、に花になく鶯云ミとある二句彼前後の奏覧本い  
づれの方なりけん知るべからされども一本には花にさへつ  
る鶯梢になく蟬の声をきけば」とやうに有つるなるべしと  
れば真字序に若<sup>キ</sup>夫春鶯之囀<sup>リ</sup>花中<sup>ニ</sup>秋蟬<sup>ノ</sup>吟<sup>スル</sup>樹上<sup>上</sup>とは訳  
しつるなるべし其は此方の文を漢文に訳すには趣<sup>キ</sup>を執<sup>リ</sup>事  
を転じて訳すも常の習<sup>ヒ</sup>にはあれどか、る処は蛙にても蟬に  
ても文の上に採ては強<sup>ト</sup>て抱(ママ、「拘」カ)はるへき事  
にあらされば元の仮字序蛙とあらむには必さこそ書ぬへけ  
れ然るを古き序註より以來<sup>コナク</sup>た、和漢の透<sup>ヒ</sup>とのみ思<sup>ヒ</sup>執<sup>リ</sup>來<sup>リ</sup>つる  
はこ、に心づく人のあらさりしか故なりかくて此<sup>ニ</sup>の勝劣

を考るに鶯も蛙も共に春の動物なるうへ花も梢も共に植物  
にて春秋に対したるなど蟬とあるかたや勝<sup>ト</sup>ておほゆ  
これに対して芳樹は頭注で批判する。

芳樹云 真字序に秋蟬とあるは文章のしか書たるかよろし  
きに依て也まことは仮字序に蛙をいひて鶯に対へらるかい  
とをかしき也さるは歌を言のはといふは人の物いふ言葉の  
内にて殊にあやあるこゑなれば也これになぞらへてとりむ  
しの歌をいはんには殊にあやありてめてたきはこの鶯蛙な  
るへし人の中の言のはに対して異類の中の言のはを挙たる  
もの也こ、に蛙とあるは俗にいふ河鹿<sup>カシカ</sup>にて秋を時とせる虫  
なれば春秋の対なることいはんも更也  
蛙を河鹿とするのは、正義によるが、芳樹がそれを虫とする  
のは不審である。しかしながら、仮名序でも蟬であつたらうと  
する是香の説に対する批判としては妥当であろう。

#### 四

以上いささか詳細に過ぎるほど、本書の本文改訂について列  
挙したが、近世国学者の仮名序本文改訂の実態を示すためであつ  
た。

現在ではこれらの本文改訂は一顧だにされないため、過去にどのような説が行われたのかはほとんど取り上げられることがない。本稿でそれらを取り上げたのは、是香の改訂説はそれらの中でも最も過激であり、それに沿って述べることで、近世の改訂箇所と諸説の発展の様を見て取ることが出来ると考えたからである。是香が改訂の必要なしとした箇所もあるので、改訂が議論されたのは本稿で取り上げた箇所のみではないが、代表的な箇所はほとんど含まれていると言ってよい。特に二で取り上げた箇所は近世の改訂の代表的箇所と言ってよい。

これを見ると、仮名序は確かに意の通じがたい箇所が多い本文であることが判る。そのことを、直ちに本文の乱れにつなげるのは問題であるが、解釈において参考とすべき点は絶無ではない。また、その改訂説の進展ぶりは国学者それぞれの個性と相俟って、興味深い。仮名序の解釈いかにとは別に検討すべき点がある。

一方、三で示した改訂箇所は概ね是香独自のもので、本書がほとんど流布しなかったためもあり、後人への影響がほとんど見られない。また、是香の古今集成立論や両序の關係に関する見解などは全く顧みられなかった。従って、本書は仮名序研究

史の流れの中で孤立した存在である。

本書の三で示した改訂の根拠は、一つには非定家本系諸本文によるもの、もう一つは真名序からの推定によるものである。

前者は是香所持の家隆筆と伝える建久本、真淵も用いた難波本、さらに飛鳥井榮雅卿の抄本、また、小沢蘆庵の校合本に見える為本を異本として参考にしている。このうち、建久本、難波本、為本の三本が特に参照され、それに従って本文が改訂されている。建久本は明らかに清輔本であり、為本もそれに近い本文を有する。それに対し、難波本は唐紙卷子本と思われるが、完全には一致していない。唐紙卷子本の模刻本は近世には版行されなかったと思われるので、是香の見たものは転写を重ねた写本であったと思われる。飛鳥井榮雅卿抄本については、言及する箇所が少なく、性格は不明である。

こうした異本による校合改訂は本文の混淆を招くとして現在では行われない方法であるが、単なる推論に拠るより、当時においては、寧ろ実証的な面もある。また、たまたまかもしれないが、清輔本と唐紙卷子本は現在では系統的に定家本と異なる有力な伝本であることが判明しており、本文を混淆することはともかく、本文の比較検討には有用な方法であったことも否定

できない。

これに対して、真名序を参考に本文を改めるのは、真名序を解釈に利用するのが古く顕昭に始まり、契沖では全面的に展開されているものの、真名序によって作文するのは行き過ぎで、嘩然とさせられる面もある。実証的な考証を見せる是香がこのような行き過ぎに陥ったのは、一に要約を述べた『古今集仮字序真字序論』の論理をさらに発展させようとしたためであることは明らかである。是香は真名序は後人による仮名序の翻訳と認定するが、その一方、その翻訳は仮名序が現在の仮名序ほど乱れていない時点での翻訳であるとするので、仮名序の原型を推測する上で役立つと考えるのである。こうして、仮名序に不審のある箇所や、両序異なる箇所では真名序を参考にして改めることとなったのである。

もちろん、これらは行き過ぎ以外のなものでもないが、仮名序の真意を知る手がかりとなる面もあり、今一度検討する余地があるように思われる。

〔注〕

(1) 佐佐木信綱氏「歌学者としての六人部是香」(『歌学論叢』

明41刊所収)。

(2) 拙著『六条藤家歌学の研究』第一部第五章「清輔本古今集の伝来と流布」430頁以下参照(平11刊、初出「三田国文」10昭63・12)。

(3) 前掲拙著439頁で指摘した。

(4) 佐佐木氏前掲書350―351頁。

(5) 前掲拙著441―444頁。

(6) これらは香が参照した諸本については前掲拙著440―444頁に家蔵古今集版本と静嘉堂文庫蔵古今集正義版本(五一九―一―二二〇六四)への是自筆書入によって知見を示した。それらの内、『訂正古今集序』等において是香が言及する蘆庵校合本については知るところがない。近時刊行された蘆庵文庫研究会編『蘆庵文庫目録と資料』(平21刊)にも関係の書は見えない。また、それに校合された「為本」についても詳細不明であるが、左記のことが判明した。

正保版二十一代集の古今集仮名序部分に「為」と注記する校合書入がある本が存在する。稿者の知るものは国会図書館蔵本(八五三―一六六、渡辺千秋氏旧蔵)及び慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本(九一一―ト二二)の二本

である。

まず、国会本は古今集巻頭の貼紙（近時のもの）に「二一代集全五十六冊二箱入／全部を通して書入あり／蘆庵筆ト云」とあるが、蘆庵自筆書入とは認め難い。しかしながら、古今集仮名序の中途より、「為」と注記する校合があり（仮名序の書入はこれのみである）、この「為」注記は是香が蘆庵校合本に見えるとする「為本」とよく一致する。

一方、斯道文庫本は何人の書入かは不明であるが、やはり二一代集全体に書入があり、古今集仮名序の「為」注記は国会本と一致する。

従って、以上二本は是香の利用した蘆庵校合本そのものではないが、「為」の校合書入は何らかの形で蘆庵と関係があることは確実である。

なお、この二本の書入は基本的に契沖の書入の系統にあると認められるが、「為」の校合書入は契沖の書入を今井自閑等が移写したとされる三手文庫蔵本（歌一午一六三）には見えないので、契沖以後に何人かが付加したものであろう。

また、蘆庵が契沖書入の二一代集を所持し、希望者に貸出し、書写を許していたことを北野克氏が蘆庵書簡によって指摘されている（北野氏「小沢蘆庵所持「契沖書入本廿一代集」の存在に就いて、並びに「名所弁覧」のこと」契沖全集月報16昭51・5）。

(7) これらのことは佐佐木氏も少し述べておられる（前掲書324―325頁）が、稿者なりにもう少し詳細に述べることとした。

(8) 久曾神昇氏「古今和歌集成立論 研究編」149―150頁参照（昭36刊）。

(9) 小川剛生氏「四辻善成の生涯」（二条良基研究）附章、平17刊、初出「國語國文」平12・7の指摘により、飛鳥井慈孝氏編『曇華院藏通玄寺志』（昭53刊）に影印された善成の奥書を参照した。

(10) 浅田徹、五月女肇志氏「国文学研究資料館マイクログフィルムによる古今和歌集奥書集成（三）」（国文学研究資料館「調査研究報告」22平13・11）の古今一八三に奥書が示されている（小川剛生、佐藤裕子氏による（四）「調査研究報告」23平14・11に補正がある）。なお、この本は室町中



期順の書写本で、足利義視筆と極められているが、真筆の可能性がある。

のところ不明である。注(15) 拙稿140—141頁及びその注(16) 参照。

- (11) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期』(改訂新版 昭59刊) 482—483頁参照。なお、この奥書が將軍家(義政か)より下賜された定家自筆の古今集について触れている点が注目される。

- (19) 後拾遺集序に「はなをもてあそびとりをあはれはずといふことなし」とあるを指す。
- (20) 「千秋云、訳に、オモシロイトコロガアツテとあるは、

- (12) 佐佐木氏前掲書350頁。

- (13) 佐佐木氏前掲書323頁。

真字序に、頗有逸興とあるによりて、補はれたるなるべし、此序には、これにあたる詞の有しが、落たる也、」と注する。

- (14) 余材抄では古注のみ後人とし、六義の例歌はそのままとする。

- (21) 以下、是香は仮名の字体の類似による誤りを言わんがため、崩し字を書く。表示しにくいので、ここでは、字母の漢字を示すに止める。閑之、満久がそれである。

- (15) 拙稿「古今集仮名序の注釈と改訂について(一)——荷

田春満『古今和歌集序説』——」(『斯道文庫論集』43平21・

- (22) 「臣等」を古訓で「マクラ」と訓ずるといふ指摘は余材

2) 参照。

抄が初めてではない。古くは為家抄(為家説に影響を受けて

- (16) 顕昭本古今集勸物にも同様の指摘があるが、現行の貫之集に該当箇所なし。

く行われた)にも次のようにある。

まくらとは臣等と云詞也、春の花のにほひすくなくて

- (17) 注(15) 拙稿の注(5) 参照。

といへるは卑下の詞也、ことは、つたなくて哥よむと

- (18) 春葉序では「なり」を補わず、その代りに、前にある「からのうたにもかくそあるへき」をここに移している。

云名のみ長ナカシマヤしたる由を云也、延木式序云臣等と書て

これは、春満の問書類には見えず、春満の考えか否かは今

まくらと点之(読点稿者)



ける女の人の心をなやませるに似たるもあり、と見え  
雲州消息に、花山僧正之長、此道猶懸、画女之動、人情、  
といへり、これらいさ、かその文かはりたれど、いづ  
れも女のいたづらに心をうごかすとやうのおもふきに  
かきなして、女を見ていたづらにこゝろを動かす、と  
心うべきさまにはあらず、もとより絵にかける女が、  
その糸を見る人の心を動かす事にはあらざる  
る女を人のみて、みずから心を動かす事にはあらざる  
也、かゝれば、を見ての三字は、アヤマリ、アヤマリにて、もとは絵に  
かけるをうなのいたづらにとありけん、あさみどり糸  
よりかけてしらす露を玉にもぬける春の柳か、名にめ  
て(ママ)おれるばかりぞをみなへしわれおちにきと人にか  
たるな、などみな意はいとしもふかゝらで、いはゆる  
誠すくなしともいひつべきさましたる歌どもながら、  
言葉づかひうつくしう、はなやかによみこなして、け  
にゑにかける女の心ちぞするや、(巻一、二三オ―二  
四オ)

また、西田直養の説とは『笹舎漫筆』巻一に次のように  
ある。

#### ○画図好女

古今集の序に、僧正遍昭はうたのさまはえたれども、  
まことすくなし。たとへばゑにかけるをみなをみて、  
いたづらにこゝろをうごかすがごとし云々。こはいか  
にもうたがはしきを、余材抄、打聞に、やすらかにと  
かれて、遠鏡などにも、しひて論アヤマリひのなきをとりい  
で、いふがをこなれども、ひそかに考えるに、画にか  
ける女をみてこゝろをうごかすは、またくおろかなるわ  
ざにて、まことすくなしとはいひがたかるべし。ゑに  
かける女のいたづらに心をうごかすがごとしとこそあ  
るべけれ。さきなる心あまりて詞たらず、しほめる花  
のいろなくて、にはひのこれるがごとしてふもて考  
べ、自他のけぢめもあるべければ、ゑのかたより人の  
こゝろをうごかし、はなのいろはなくて、にはひはの  
これるなど、よく対したり。真名序もて引あはせ考  
るに、如「画」好「女」徒動「人情」云々とありて、見「画」  
好「女」とはなければなり。(日本随筆大成新版第二期第  
三卷所収)

(25) 前掲拙著434頁。

(26) 拙稿「古今和歌集版本考(続)」(『斯道文庫論集』35平

13・2)における異同箇所(3)参照。なお、この事は既に西

下経一・滝沢貞夫両氏編『古今集校本』(昭52刊)に「も」

の字、版本にはある」(西下氏の注記)と指摘されている。

〔付記〕御所蔵の資料の閲覧複写及び紹介を許可された京都女子大学附属図書館に深く感謝を表すものであります。

(本章終り)

(参考)

前回荷田春満『古今和歌集序説』を中心に春満の仮名序の改訂について述べたが、その際、春満の注そのものを見た人は稀で、多くは『春葉集』に付載された春満自筆と称する仮名序本文に拠っていることを明らかにした。従って、『春葉集』付載の仮名序は素性はともあれ、仮名序研究史の上では重要である。しかしながら、現在では春満の旧版全集で容易に見ることが出来るので、改めて紹介の要はない。

ここに、紹介しておいた方が良いと思われるのは、荷田蒼生子校訂の古今集に付された蒼生子の跋文である。蒼生子(享保七・天明六、一七二二―一八六)は春満の姪であり、養女である

ので、春満の説と多少の関係を見ることが出来るからである。

また、当時の仮名序本文への疑問のありさまをうかがうことも出来よう。

蒼生子の跋文は左記のごとくである。

序の初にひとの心を顕昭の本にはひとつ心とありひとつ心ならては聞えねと今の本みなひとの心とあれは人みのよみきたれるまゝ、にひとの心と書てかたはらにひとつ顕本としるし侍りぬ

集中の哥も菅家萬葉六帖朗詠など詞の異なるあれと数多ければことくはあけす唯ひとつ心の例にて一本の宜しきをはみなかたはらにしるし侍りぬ

序の中六義の所おほさ、きの尊をそへ奉れる哥此詞と六義の例に引る哥はみな後の人の添し物なれと是も今の本に皆かくあれは人みのよみ来れるまゝ、にのそかすして置侍りぬ序の中細字にしるせるは是又六義の哥よりも後にしるせる物なれと右の例にて其まゝ、におき侍りぬ

序の中花をそふとての詞或説には花をこふとてのあやまり也とあれと後拾遺集の序を考ふれば花をもてあそふのもて

あの三字落たらんと見えぬれと書そへんもさかしらなれは  
是も又其まゝにして上つかたに後拾遺の序をあけて其あや  
まりなるへきやをしらする也

序の末まぐら詞此くはろのあやまりなる事明らかなれとこ  
れも又かたはらにまろらとしるし侍る也

哥の左にこれは其人の也とある事多かり皆後の人の書添  
たるなれとのそかす

伊勢物語に出せる哥の詞書例よりはいと長きもあまた有是  
はいせ物かたりを古今集より古き書と思ひし人の此集の中  
に書入たるなるへけれとそまゝにこれものそかす

墨けしの哥何の巻その哥の上下など、有是も又今の本のまゝ、  
にして改めす

かななは皆いにしへのかななに書あらため文字のたかひは  
古今集の一本の宜しきにくらへてあやまりとするきは則書  
あらため或はいつれの本も聞えかたきには其字かとかたは  
らにしるし侍りぬ

こたひ此本あらたに木にゑり侍るはまた心もしらぬうな  
子などの読ならはんにみやすく心も得つへき為にとてなれ  
は清にこりをもことくくしるしいさ、か聞置し事をも所々

しるしたりしを余りにをこなりとわらひ給ふ人もあらんか  
つ、ましよう南

蚊田蒼生

仮名序の中、六義の例歌と古注はともに後人の所為であると  
するが、六義例歌の挿入は古注に先立つとするのは、国学者に  
おいて時に見られる見解である。総体に新見はないが、古今集  
版本の中、この版は広く行われた形跡があり、比較的早い時期  
に仮名序の問題点に触れている点は見逃せない。

(注) 拙稿「古今和歌集」版本諸版一覽」(『斯道文庫論集』

18 昭 57・3) において 12、「古今和歌集版本考——前稿の  
補訂をかねて——」(『斯道文庫論集』34 平 12・2) 「古今  
和歌集版本書影集」(『斯道文庫論集』36 平 14・2) におい  
て (14) として掲げた安永九年(一七八〇) 刊大本を指す。初  
印本の刊記には「安永九年／庚子春／江戸書林／吉文字屋  
次郎兵衛／北奥甚助／前川六左衛門」とあり、蒼生子生前  
の刊行である。